

氏 名（本 籍）	井 上 摩 紀 （大阪府）
学 位 の 種 類	博士（学術）
学 位 記 番 号	博課第270号
学位授与年月日	平成17年 3 月24日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間文化研究科
論 文 題 目	身体表現を用いた性役割観の研究
論文審査委員	（委員長） 教授 小田切 毅 一 教授 佐久間 春 夫 教授 杉 峰 英 憲 名誉教授 平 井 タカネ （奈良女子大学）

論文内容の要旨

本研究は、言語による論理的認識を基調に論議・検討されてきたこれまでの性役割観調査に対して、身体を通しての直感的認識に着目する新たな方法の必要性を示唆することを目的とするものである。すなわち先行研究を詳細に踏まえた上で、言語的・論理的認識における性役割観と、身体的・直感的認識における性役割観との間には、ズレが存在するのではないかという仮説のもとに、この仮説を検証するために、言語による性役割観調査に用いられる項目の再分類を図るとともに、さらに「自由歩行動作」や「椅座動作」を用いた身体による性役割観調査を展開するものである。

第 1 章では、本研究の中心課題である、身体を用いた性役割観調査と比較するために、まず言語を用いた性役割観調査を実施し、それに検討を加えた。すなわち第一節では、BSRI（ジェンダー・アイデンティティ尺度）の項目を再分類する調査を行い、因子分析を行った。その結果、「男らしさ」と「女らしさ」には明確な区別があり、また「男らしさ」が普遍性の高い性役割ステレオタイプを持ち続けている一方で、「女らしさ」は中性性との境界線が曖昧で、従来のステレオタイプからの変化が認められることが明らかとなった。第 2 節では、BSRI の項目の再分類を用いた言語ジェンダー・アイデンティティ測定の新たな活用についての提案を行った。

第 2 章では、身体的・直感的認識における性役割観の特徴を明らかにするために、自由歩行動作と椅座動作を課題とした調査を実施した。すなわち第一節では、二つの課題動作による「男らしさ」と「女らしさ」の表現における、舞台上の空間の使用時間を測定する方法によって調査を行った。その結果、男らしさ表現では「強い・支配的」とされる舞台中央を、女らしさ表現では「弱い・暗い」と

される舞台の後列の端、特に左端の空間が多用された。身体的・直感的認識における性役割観では、「男らしさ」と「女らしさ」は区別されており、基本的には旧来のステレオタイプと一致することが明らかとなった。また椅座動作について、男らしさ表現では舞台中央とともに、女らしさ表現の特徴であった後方左端も多用されており、「男らしさ」に以前は「女らしさ」の特徴とされた特性が含まれるよう変化したことが示された。

第2節では、椅座動作の持つ意味を検証するため、男らしさ表現、女らしさ表現についての鑑賞者の視線を分析する実験と、表現者の工夫した表現を分析する実験の2つを行った。どちらの結果も男らしさ表現と女らしさ表現で異なる特徴を示す姿勢は椅座姿勢であることが明らかとなった。脚が性役割表現に有効な身体部位であり、椅座動作は脚を表現の主体にする効果的な動作であることが示された。

第3章では、実際に舞台上を動く方法に代わり、身体表現イメージでの選択空間を用いて、身体的・直感的認識での性役割観調査の可能性を検討した。第1節では、第2章での調査における椅座動作と同じシナリオに沿った演技をイメージして、椅子を置く位置の紙上空間における選択傾向を調査した。その結果、第2章の実演時よりも前よりの空間が選択され、イメージで選択した紙上空間では実演時の舞台空間の各領域、特に、前後の空間が持つ意味が薄れることが示された。

第2節では紙上空間独自の男らしさ表現と女らしさ表現の選択空間に着目して性役割観の解釈を行った。その結果、実演時とは解釈方法は異なるものの、身体的・直感的認識における性役割観の特徴が紙上空間でも確認された。

第4章では、身体的・直感的認識における性役割観と男女平等志向性の関連を検討するため、第2章と第3章で実施した身体表現による性役割観調査の結果から、対象者を性役割観タイプに類別し、SESRAS-S（平等主義的性役割態度スケール短縮版）得点の比較を行った。第1節および第2節の論議の結果は、タイプ間での有意な差は認められなかったものの、男女性役割を区別するが伝統的ステレオタイプとは異なった性役割観タイプが最も平等志向的である一方で、ステレオタイプの性役割観タイプと男女性役割を同一とする性役割観タイプは伝統志向的であることが示唆された。

これらの結果を踏まえた第3節の論議では、現代日本の若者が考える男女平等とは、男女性役割の同一化や区別を無くすことではなかった。むしろ両者を区別するが、伝統的性役割とは異なる、新たな価値観を性役割に持たせることを指向するものであるという結論を得た。

第5章では、身体表現を用いたジェンダー・アイデンティティ測定の可能性を検討した。まず第1節において、第2章で調査した自分らしさ表現時の使用空間と男らしさ表現および女らしさ表現時の使用空間と比較することによって、対象者の自己概念の全体傾向を検討した。その結果、全体傾向には、いくつかのタイプのジェンダー・アイデンティティを持つ対象者が混在している可能性が示された。

第2節において第1章で提案した、再分類された言語によるジェンダー・アイデンティティ測定法で対象者を分類し、ジェンダー・アイデンティティが「自分らしさ」を表現する空間の使用傾向に表れるかを検証した。その結果、言語によるジェンダー・アイデンティティ測定で、「男らしさ」または「女らしさ」が明確であった場合は、「自分らしさ」を表現する空間は、第2章で明らかにした男らしさ表現あるいは女らしさ表現の使用空間と一致していた。また、ジェンダー・アイデンティティが未分化であった場合は、「自分らしさ」の表現において、女らしさ表現と一致した空間を使用していた。未分化タイプには男性が多く、空間使用には、言語による測定法では見いださない、自己概念の中に「女らしさ」と共通する部分を持つことが示された。すなわち、言語で測定される論理的認識では見出せない、身体で直感的に認識されるジェンダー・アイデンティティの特徴を得ることができた。

結章では第1章から第5章までで得られた知見をもとに総合的に考察を行った。第1節では、第1章から第3章で得られた結果に基づき、性役割観の言語での論理的認識と身体での直感的認識のズレとその様相について考察を行った。第2節では、第4章での結果に基づき、身体的・直感的性役割観と男女平等志向性の関連について考察を行った。第3節では、言語で測定されたジェンダー・アイデンティティと身体で表現した自分らしさとの関連を検討し、身体を用いたジェンダー・アイデンティティ測定の可能性について考察した。第4節では残された課題について述べた。

本研究の論議は、以下のように総括することができる。

1. 性役割観に関して、言語による論理的認識と身体による直感的認識にはズレが存在し、身体による認識では「女らしさ」よりも「男らしさ」に関してステレオタイプからの変化が大きい。
2. 男女性役割を区別はするが、新たな価値観を持つことが平等志向的である。
3. 身体動作によるジェンダー・アイデンティティの測定は、言語によるジェンダー・アイデンティティの測定との統一性が確認され、さらに、身体動作には言語では測り切れないジェンダー・アイデンティティを明らかにできる可能性がある。

井上摩紀が提出した論文の概要は、以上の通りである。

論文審査の結果の要旨

本研究の目的は、言語による論理的認識を基調に論議・検討されてきたこれまでの性役割観調査に対して、むしろそれとの補完的な関係をも生じ得る、身体を通しての直感的認識に着目する新たな方法の必要性を示唆することである。

もとよりこれまでの性役割観に関する研究は、専ら言語を用いる方法によって行われてきた。身体感覚によって捉える性役割観に注目し、それを調査法開発へと結びつけるような問題発想も、殆ど見るべき成果を挙げてきていない。こうした状況を考えると、身体を通しての直感的認識による性役割観をどのように把握可能かについて、舞台を想定した演技論とかかわる身体表現学の手法を用いて問題提起がなされたことには、その独自性ともかかわって一定の評価がなされてよいであろう。

本研究から得られた知見は、次のように3点にまとめられている。すなわち1. 性役割観に関して、言語による論理的認識と身体による直感的認識にはズレが存在し、身体による認識では「女らしさ」よりも「男らしさ」に関してステレオタイプからの変化が大きい。2. 男女性役割を区別はするが、新たな価値観を持つことが平等志向的である。3. 身体動作によるジェンダー・アイデンティティの測定は、言語によるジェンダー・アイデンティティの測定との統一性が確認され、さらに身体動作には言語では測り切れないジェンダー・アイデンティティを明らかに出来る可能性がある。

以上の知見は、以下のような五段階に及ぶ調査や実験に基づく論述が展開されたことによるものである。まず第一に、言語による性役割観調査については、今日最も多用されている Bem の BSRI (ジェンダー・アイデンティティ尺度、1974年) を対象に、同調査の項目を「男らしさ項目」「女らしさ項目」「中性項目」に基づいて再分類することによって、その妥当性を検証した。その結果「男らしさ」と「女らしさ」には各々明確な区別が認められ、また「男らしさ」が普遍性の高い性役割ステレオタイプを持ち続けている一方で、「女らしさ」は「中性性」との境界が曖昧で、従来のステレオタイプからの変化が認められることなどが明らかとなった。

次いで第二には、身体によって直感的に認識される性役割観を把握するために、舞台上で「男らしさ」「女らしさ」「自分らしさ」を演じ、その演劇的即興表現時の空間使用時間を測定する実験がなされている。4.5m四方の正方形を9つの領域に等分割した舞台で、「自由歩行動作」と「椅座動作」の二つの演技動作が課題として実施された。その結果、男らしさ表現では「強い・支配的」とされる舞台中央を、女らしさ表現では「弱い・暗い」とされる舞台の後列の端、特に左端の空間が多用されていることが明らかになった。そして身体的・直感的認識における性役割観では、「男らしさ」と「女らしさ」は区別されており、基本的には旧来のステレオタイプと一致することも明らかになった。

さらに椅座動作については、男らしさ表現では舞台中央とともに、女さし表現の特徴であった後方左端も多用されており、以前は「女らしさ」の特徴とされた特性が「男らしさ」に含まれるように変化したことが示唆された。椅座動作の持つ意味をさらに検証すべく、鑑賞者の視線を分析する実験や表現者の工夫した表現を分析する実験を重ねた結果、男らしさ表現と女らしさ表現では明らかに異なる特徴を示す傾向がみられた。また脚が性役割表現に有効な身体部位となっており、いずれにせよ椅座動作はこの種の実験に効果的な動作であることが明らかになった。

続いて第三には、調査方法を単純化させた身体的・直感的認識による性役割調査の可能性を検討する意味で、実際に舞台上を動く前述の方法に代えて、紙上空間を用いて空間を選択させる方法に注目した。その結果上述の実験時よりも前方の紙上空間が選択される傾向があり、イメージで選択した紙上空間では実演時の舞台空間の各領域、特に前後の空間が持つ意味が薄れることが指摘されている。紙上空間に固有の、左右の空間が示す男らしさ表現と女らしさ表現の位置関係に注目したが、身体的・直感的認識における性役割観の特徴は、この紙上空間でも同様に確認できた。

さらに第四には、実演時の空間使用の特徴に基づいた三タイプ（すなわち「男女性役割観同一型」「男女性役割分化ステレオタイプ型」「男女性役割観分化独自型」）の間で、SESRA-S（平等主義的性役割態度スケール）得点を比較することによって、身体によって直感的に認識された性役割観と、男女性役割観に対する平等指向性との関連について論述されている。その結果、平等主義的性役割態度スケールの得点には優位な差が認められなかったものの、最も平等志向的な態度を有する傾向を示したのは「分化独自型」であったことが明らかになった。また平等主義的態度と「男女性役割を区別する」性役割観が同時に存在することは、単に性役割同一化が現代の若者達の捉える男女の平等ではないことが示唆されると指摘し、最も伝統志向的な態度を有していたのが「分化ステレオタイプ型」とであるとみなしている。

そして第五には、言語による性役割観調査と身体表現を用いた性役割観調査を比較することに基づいた、身体表現を用いたジェンダー・アイデンティティ測定の可能性についての論述がなされている。椅座動作を用いた「自分らしさ」を表現する使用空間の全体的傾向の中に、ジェンダー・アイデンティティがあらわれることを検証しようとしている。言語測定法で分類したジェンダー・タイプ分類の試みと自分らしさ表現での使用空間の関連の比較検討がなされ、特に「未分化タイプ」の空間使用に表れる男らしさの「揺らぎ」（変化傾向）について言及がなされていた。

以上の五段階に及ぶ調査や実験は、それぞれ問題意識に沿って合理的に展開されていた。ただし今後の課題と関わって、データの信頼性を一層高めることや、またより多様な実験条件を用いて種々試行する必要性を指摘する意見も出された。さらに調査や実験で得られた結果の論述についても、一部の用語使用で不鮮明な箇所があると指摘されたが、これらの事柄はいずれも、本論文の意義や今後の研究発展への期待を失わせると判断させるものではなかった。

以上の審査の結果を踏まえて、本委員会は、本論文を人間文化研究科後期博士課程修了にふさわしい内容を有した論文であると評価した。